法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

モーゼス・メンデルスゾーンという悲劇 : ドイツ・ユダヤ人の原型

内田, 俊一

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
89
(開始ページ / Start Page)
67
(終了ページ / End Page)
80
(発行年 / Year)
1994-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004730

Hosei University Repository

モーゼス・メンデルスゾーンという悲劇

——ドイツ・ユダヤ人の原型——

内田俊一

クリストフ　ユダヤ人じゃないユダヤ人もいるってことですね。
（レッシング『ユダヤ人たち』第二十二場）

I

アウシュヴィッツの惨劇を経たあとでは奇異に聞こえるかもしれないが、ドイツほどユダヤ系知識人がその文化に占める比重の大きかった国はほかにない。ユダヤ人が特にドイツに活躍の場を見出した背景には、（ユダヤ人が数多く居住する）東欧圏に開かれたその地理的位置と小国家分立の政治情勢が彼らの流入を容易にしたこと、さらに中欧から東欧に広がるユダヤ人たち（アシュケナジム）の日常言語がイディッシュ語という、元来中世ドイツ語をもとにしてできた言語だったという事実が認められようが、いずれにしてもドイツでは他のヨーロッパ諸国とは異なり、ユダヤ系知識人は文化史の単なるエピソードではなく、文化の根幹を共に支えるところまで成育してい

Hosei University Repository

た。

マルクス、フロイト、アインシュタインと精神の巨人を並べ立てるのはすでに常套句に属するだろうが、少なくともある時期のドイツ・オーストリアでは世界的サイズのユダヤ系知識人が数多く輩出したことは間違いない。ドイツの文化への彼らの貢献とその後のナチスによる無残な結末とはどう釣合いがとれるのだろうか。それとも天秤の上の重さは精確に見合っていると言うべきなのだろうか。ドイツ文化にとってユダヤ人とは何だったのか。また逆にユダヤ人にとってドイツ文化とは何だったのか。

ユダヤ系同化知識人の発端はモーゼス・メンデルスゾーン（一七二九―八六）に始まるとされる。そしてあっと言う間にその子供の世代、すなわちメンデルスゾーンの娘ドロテーア（のちにフリードリヒ・シュレーゲルと駆落ちしてドロテーア・シュレーゲルとなる）やヘンリエッテ・ヘルツ、ラーエル・ファルンハーゲンらを始めとするベルリンのユダヤ女性によるサロン文化の時代には、「その後のいかなる時代よりも多くの通婚を生んだあのドイツ人とユダヤ人の社交生活の短い黄金時代」[1]を迎える。十八世紀後半から十九世紀初頭にかけてのこの五十年余りの期間は、ドイツのユダヤ人にとっては決定的な時代、「社会が、いや、ほかでもなくその指導階級が否も応もなくユダヤ人を受容れたばかりか、驚くべき熱狂をもって彼らをたちまち同化し、自分のうちに摂り込んでしまおうとした時期」[2]であり、このような現象は他のいかなる国にも見られなかった。

その後もユダヤ人のドイツ社会への進出はとどまるところを知らず発展する。しかしすでに十九世紀初頭には公然と姿を現わしていた（あくまでも宗教に根を持つ中世の反ユダヤ主義とは区別される）近代特有のユダヤ人憎悪は、ちょうどそれと正確に比例するように増大してゆき、この二つの相反するベクトルの力は、一九三〇年代にはついに核爆発を引き起こすに至る。一五〇年以上にわたって築き上げられてきたものが何もかも失われてしまったように見えるこの焼野原の上に立ってかつての「短い黄金時代」を振り返って見る時にはある種の感慨を禁じ得ないのだが、いったいボタンの掛け違いはどこで起きたのだろうか。それは未開状態の暗いゲットーからヨーロッパ文明の明るみに向かう不断の上昇の道に突如として現われた奈落だったのか。それとも幸福の絶頂から地獄へと突き進んでゆく不断の下降の道だったのか。上昇とも下降とも両様に解釈できるこの道のりのどこに間違いがあった

Hosei University Repository

のだろうか。それは避けることのできない必然的な道のりだったのだろうか。（そこにある種の必然性が認められたとしても、それがナチスの蛮行の罪状をいささかなりとも割り引くものでないのは無論だが。）あるいはあとから振り返れば、二度と再び帰り来ない黄金時代としていささかの感傷をも込めて追憶される幸福な出会いの時期にも、のちの悲劇の萌芽はすでに兆していたのだろうか。

ユダヤ系知識人はドイツ文化の歴史の中では十八世紀半ばに突如として登場する。それはいわばドイツ文化の側から新しく発見されたのである。ユダヤ系知識人の「発見」、それはコロンブスによるアメリカ大陸の「発見」にも比すべきものだった。コロンブスによって「発見」される以前から何千年にもわたってアメリカ大陸にはすでに人が住んでいた。コロンブスによってアメリカが「発見」されたとは、ヨーロッパ人の傲岸にすぎない。ユダヤの知識人は、近代ヨーロッパを形成したどの民族よりも古い昔から、脈々とその伝統を受け継いできていた。それが近代ヨーロッパの文脈の中で、その論理に従って改めて「人類の新しい見本」[3]として「発見」された。ユダヤ系知識人の出現はいわば近代ヨーロッパ文化によって要請されたものだった。登場したから発見されたのではなく、論理上要請されたから出現した、と言うほうがおそらく実態に近い。しかもこれがコロンブスによるアメリカ大陸「発見」よりもさらに悪質なのは、新しく「発見」されたと見なされたものが、実は「発見」した側のヨーロッパ文明を、（キリスト教という回路を経て）その根底において形成するものだった、あるいは少なくともそれを形成する重要な要素のひとつだった、という事実が全く度外視された点である。それは歴史の偽造に等しい。

最初に「発見」されたユダヤ系知識人はモーゼス・メンデルスゾーンだった。彼がいかに時代の寵児だったか、現代から、それも彼の死後一〇〇年以上を経てようやくヨーロッパ文化が導入された遠い日本から想像するのは難しい。おそらくライブニッツ＝ヴォルフ流の群小通俗哲学者のひとりとして、あるいは作曲家フェリクス・メンデルスゾーン＝バルトルディの祖父として知られているにすぎまい。しかし彼の最も有名になった著書である『フェードン、あるいは霊魂の不滅について』（一七六七）は二年間で三版を重ね、英語、フランス語、オランダ語、イタリア語、デンマーク語、ロシア語、ポーランド語、ハンガリー語、ヘブライ語に翻訳されたし、ドイツに限らず、ヨーロッパ全体の同時代の知識人の中で、メンデルスゾーンについての評言を残さなかった者はおそらくひと

Hosei University Repository

りもいないと言ってよいほどなのである。彼が博した異常なまでの喝采には、彼がユダヤ人であるという事実が大きく与っていたことは疑いない。ユダヤ人がドイツ語で本を書くなどということは前代未聞のことだった。非ユダヤ人の目には彼はまるで「異国の不思議な動物」[4]のように見えた。未開種属の一員が突然高尚な哲学書を出版したというような受けとめ方をされたのである。この熱狂的な賞讃にはしかしどこか胡散臭いものがある。賞讃はゲットーの悲惨の中からかくも優れたヨーロッパ的知性が生まれたことに向けられた。しかしそもそもユダヤ人とは、ヨーロッパ文明とは縁もゆかりもない野蛮な未開人種にすぎなかったのだろうか。ユダヤ人全体をいったん単なる抑圧された者の地位にまで貶しめておき、そこから近代ヨーロッパ文化の方向に浮かび上がってきた者を例外的ユダヤ人として賞讃するこの遣り口は、のちのナチスに至るまでの反ユダヤ主義と共通する要素をどこかに隠し持ってはいなかったか。

II

一七四三年九月、小柄でせむしの十四才の少年がプロイセン王国の首都ベルリンにやって来た。彼は一三〇キロほど離れた田舎町デッサウのゲットーからはるばる歩いて来たのだった。彼の名は生まれた町の名にちなんでモーゼス・デッサウといった。宿主民族の側がユダヤ人に生まれた町の名を姓として与えることは、当時もそれ以後も広く行なわれた慣例だった。のちに彼はモーゼス・メンデルスゾーンと改名するが、これはユダヤ人の習慣どおり「何某の息子の何某」という形式にのっとった姓名で「メンデルの息子のモーゼス」という意味である。しかし彼がこれをヘブライ語でモーシェ・ベン・メンデルとせずに、あえてドイツ語で表現したことは、彼の精神の姿勢を考える上で象徴的と言えるかもしれない。

彼はデッサウでの師であったラビのダーフィット・フレンケルがベルリンのラビ長に招聘されたのにともなって、この師のもとで勉学を続けるために追って来たのだった。彼はベルリンでユダヤ人の通行が唯一許可されていたローゼンタール門の前に立ち、一度は追い払われながら、ユダヤ人が市街地に立ち入ったり国境を越える際に法

Hosei University Repository

律で定められた身体税（牛一頭にかかる関税と同額だった）を支払い、ようやく市中に入ることを許された。「一七四三年のこの日をもって、近代ドイツ・ユダヤ人史の開幕とすることは一つの常識」[5]とされている。

六年を越える勉学と窮乏の日々のうち、二十一才の時にある裕福なユダヤ人の絹商人の家に家庭教師として、のちには簿記係として雇われ、ようやく生活のめどが立つようになるが、このベルリン生活の最初の時期に彼は一群の若いユダヤ系知識人たちと知り合い、ドイツ語ばかりでなくラテン語、ギリシア語、フランス語、英語の基礎を学ぶことができた。さらに彼らによってヨーロッパの近代哲学に対して目を開かれ、特にロック、ヴォルフ、シャフツベリに惹かれるようになり、また数学や文学、美学の知識も身につけることができた。

特に彼らのうちのひとりアーロン・ザロモン・グンペルツによってレッシングと、そして彼を通じてニコライと知り合うことができたことは、メンデルスゾーンの人生にとって決定的な意味を持つことになる。チェスの相手として始まった同年齢のレッシングとの友情はその後一生を通じて続くことになり、レッシングは出会いから二五年後、死の二年前に、メンデルスゾーンをモデルとしたとされる彼にとって最後の戯曲『賢者ナータン』（一七七九）を書くことにより、この友情の記念碑を遺すことになる。

著作家としてのメンデルスゾーンをドイツの読者に初めて紹介したのもレッシングだった。メンデルスゾーンはドイツの哲学がフランスの影響を脱するように訴えた『哲学的対話』という論文を書き、レッシングの意見を聞こうとして原稿を持って行くと、レッシングは著者本人には無断でそのまま出版してしまった。これがメンデルスゾーンの処女作（一七五五）であり、同時にユダヤ人が近代ドイツ語で書いた最初の本となった。この本は当初匿名で出版されたものの、著者がユダヤ人であることはすぐに世間に知れ、センセーションを呼ぶことになる。

彼はニコライによって発行された雑誌「芸術の学問と基本学芸の双書」（のちに誌名は「最新文学に関する書簡」と改められる）にレッシングとともに参加し、美学や哲学についての論文を数多く寄稿する。一七六三年にベルリンの王立科学アカデミーの懸賞論文に応募し、『形而上的学問の明証性について』でカントを破って一等賞を獲得する。その後彼はカントと文通によって親交を結び、カントから同時代の哲学者たちの中で最も優れた者のひとりとして評価されるようになる。

Hosei University Repository

さてメンデルスゾーンの前期の著作は、代表作『フェードン』がプラトンの『パイドロス』の翻訳から出発し、次第にオリジナルな見解が付加されることによって姿を変えたものだったのを見てもわかるように、あくまでもギリシア哲学からライプニッツ、ヴォルフに至るヨーロッパ哲学本流の中に身を置いたものだった。一方で彼はベルリンのユダヤ人共同体とは生涯にわたって緊密な結びつきをゆるめず、ユダヤ人同胞のためにヘブライ語の雑誌の創刊を企てたこともあった。（アカデミーで一等賞を獲得した時には、ユダヤ人共同体は彼を最も名誉ある会員のひとりとして讃え、共同体税の支払いを免除したが、ユダヤ人社会が構成員の外部での活動を逸脱として非難するのではなく、ユダヤ人社会全体の名誉と感じたことに、この時期のユダヤ人社会の空気の変化を見ることができる。）のちに同化ユダヤ人たちによって愛用された「おもてではひとりの人間、家ではユダヤ人」という成句は、すでにメンデルスゾーンについてあてはまる。この時期の彼においては外での非ユダヤ人たちとの交遊と著作活動が、内なるユダヤ人としての存在と完全に分離しており、この二つの面がひとつの人格に共有されることでかろうじて分裂が覆い隠されていたにすぎない。

この危うい均衡はしかしある日突然突き崩され、彼は、予期もせずおそらく望みもしなかったことだが、おもての社会でユダヤ教の弁護者、そしてユダヤ人社会全体の代弁者の役割を果たさざるをえないところに追い込まれる。そう仕向けたのはスイスのプロテスタント牧師であり、「人相学」なる学問の開拓者で、ゲーテとも親交を結び、「南方の魔術師」と呼ばれ奇人として当時きわめて有名な存在だったヨーハン・カスパル・ラーヴァーターだった。ラーヴァーターは、メンデルスゾーンの人相が一風変わっていたということもあって以前から彼に対して関心を示し、一度はベルリンに彼を訪ね、彼の風貌をソクラテスに喩えて賞讃したりしていたのだが、そのラーヴァーターが一七六九年に突如彼に論戦を挑んだのである。ラーヴァーターはジュネーヴに住む学者シャルル・ボネの著書をドイツ語に翻訳し、『キリスト教立証の試み』と題して出版するが、それに次のような言葉を含むメンデルスゾーンへの献辞を添えた。「あなたが、キリスト教の現実を支える主要な論拠に納得できぬと思われるならば、どうかこの書物に反論していただきたい。しかしもしそれが正しいと思われるならば、賢明さと真理への愛と誠実さの命じるところに従っていただきたい――もしソクラテスのごとき人物がこの書を読み、反論の余地なしと認め

Hosei University Repository

たならば、そうしたでもあろうように。[6]」

これまで自らを近代的な啓蒙主義者であると信じてきたメンデルスゾーンは、「自分の中に、キリスト教の思想世界に深く入り込んだユダヤ人をしか見ることができない熱狂的なキリスト教神学者に直面している自分を突然発見した。[7]」メンデルスゾーンほどの高名な哲学者であれば、十二才年下の男のこのような不躾な要求を無視することもできたのではないか、と考えるとすれば、それは当時のユダヤ人の置かれていた立場を見誤っていることになるだろう。おそらくメンデルスゾーンにはこの要求に応えることしかできなかった。

そして事実彼は答えた。[8] ラーヴァーターに宛てた公開書簡の中で、彼はこれまで自分が信仰の問題に関する公の議論を避け続けてきた理由について説明する。それはひとつにはユダヤ人の置かれている抑圧された法的・社会的状況のためである。そのような状況下で支配的な宗教について論争を行なえば、重大な結果を引き起こしかねない。さらにユダヤ教は布教の使命を持たず、「ヤコブの一族の遺産」であり、その信仰は本質的にはユダヤ人に生まれついた者に限定されている。それゆえ自分はユダヤ教に対する攻撃には、反論をもってではなく正しく生きることをもって答えたいと思ってきたのだ。自分はきわめて早い時期から自らの宗教を吟味してきた。哲学や学問と関わり合ったのもその関連においてにすぎない。そしてその吟味の結果、自分は父祖の宗教の真実性に確信を持つに至ったのだ。そうでなければ侮蔑の対象とされるこの宗教に関わり続けることはできないだろう。

ラーヴァーターの再反論が続き、もともとの本の著者であったボネを含む他の人びとまで巻き込んで激しい論戦が交わされる。しかし改宗を迫るラーヴァーターを皮肉って嘲弄したリヒテンベルク[9]を除けば、メンデルスゾーンに有利な発言をした者は誰もいなかった。彼の非ユダヤ人の友人たちは、レッシングを含めて、私的な手紙の中でこの論戦に触れることはあっても、公的な場所では沈黙した。ユダヤ人の友人たちは後難を恐れて、これまた沈黙を守った。結局メンデルスゾーンは孤立無援でこの論戦に臨まなければならなかった。

メンデルスゾーンの友人である非ユダヤ人啓蒙主義者たちのこの態度は、ドイツにおける啓蒙主義の性格から説明できるとする論調もある。[10] ドイツの啓蒙主義は、カトリック教会への攻撃からキリスト教そのものの批判へと向かったフランスの場合などとは異なって、キリスト教の信仰内容を合理化し一般化する方向に向かった。理想的な

Hosei University Repository

ものとして考えられた「理性宗教」も、その原型となるのはあくまでキリスト教であることが暗黙の裡に前提とされていた。しかしこの暗黙の前提を理解できなかったメンデルスゾーンは、啓蒙主義の理性宗教の要請をあまりにも額面どおりに受け取ってしまったと言えるかもしれない。

この論戦はメンデルスゾーンに肉体的にも深刻なダメージを与えたが、精神的な影響はさらに深かった。彼はこのあと残された力のほとんどすべてをユダヤ人同胞のために捧げることになる。理性宗教という啓蒙主義の要請とユダヤ教の信仰とになんとか折合いをつけようとする、メンデルスゾーン本人には調和と感じられたにせよ、現代の目から見ればいたましいと形容するほかない努力の跡をここで詳しくたどる余裕はない。いずれにしてもしかし彼が回りの世界（ヨーロッパ）の価値基準をユダヤの生活や宗教や思想のすべてにあてはめる方向に、否応もなく突き進んで行かざるをえなかった、というひとつのことだけは確かである。このあとメンデルスゾーンにとってはユダヤ人同胞に対する教育が大きな課題として浮かび上がってくる。たとえば有名なモーセ五書のドイツ語への翻訳はユダヤ人のためのドイツ語教育を主目的としたものだった。ユダヤ人たちを教養ある啓蒙主義的人間にすることが、彼らをヨーロッパ文化の高みにまで引き上げることが、問題だったのである。

結局メンデルスゾーンはユダヤ人の「自己意識を高める」[11]ことに貢献したが、しかしその一方で「ユダヤ的なるものの実質が薄められ、次第次第に解消する」という道のりを準備したと言えるだろう。啓蒙主義の精神による哲学的努力とユダヤ人としての自己理解をなんとか一致させようという彼のむなしい苦闘は、結局ユダヤ人としての自らの存在を否定する方向に向かって行かざるをえなかった。渦中にあったメンデルスゾーンの目には、戦線の全体的な構図は見えなかった。しかし「首尾一貫として考え抜いたならば、彼の哲学はユダヤ人としての自己理解、つまり彼の本来の自我を動揺させざるをえなかっただろう。」[12] そして事実彼の後継者たちは、すでに一七九九年（つまりメンデルスゾーンの死後十三年を経ているにすぎない）に『幾人かのユダヤ人家長の回状』の中でユダヤ人の集団改宗を提案したダーフィット・フリートレンダーの例にも見られるように、メンデルスゾーンによって用意された道をなだれを打って突き進んで行った。

Hosei University Repository

Ⅲ

「啓蒙主義者」メンデルスゾーンは、後世の目からはそれがいかに奇異にまた矛盾に満ちているように見えようと、少なくとも本人の意識の中ではユダヤ教との緊密な結びつきの中にとどまっていた。ラーヴァーターによる攻撃ののちは、この結びつきを守ることが彼にとって喫緊の課題となった。ハナ・アーレントによれば、彼のこの課題のために最大の手段を提供したのは、レッシングから受け継いだ「理性の真理」と「歴史の真理」の区別だった。[13] 歴史は偶然的な性格を帯びており、理性に受け入れられるだけの証明力を持たない。純粋な思考の結果である「理性の真理」だけが妥当性を主張することができる。なにしろユダヤ人にとって歴史は抑圧と迫害の繰り返しにすぎなかったのだから、メンデルスゾーンがその歴史に対する意味付与を拒んだのは、当然と言えばあまりにも当然だったのかもしれない。しかしレッシングにあっては、理性はけっして歴史から遊離していたわけではなかった。彼にとって歴史は人類の教師であり、「成年」の段階に達した人間は理性の力によって「歴史の真理」を認識するのである。理性の自由そのものが歴史の所産にほかならない。[14] だがメンデルスゾーンにあっては理性の自律性は絶対的なものにまで祭り上げられ、歴史とわたり合う契機を完全に失なう。歴史やその事実はあらずもがなのものとなり、自律的理性に拠って立つ人間は完全な孤立の中に生きる。彼は他のすべての人びととは無関係に、本来すべての人びとに共通であるはずの真理を発見する。そしてメンデルスゾーンにおいてこの理性の真理は、最終的にはユダヤ教とイコールで結ばれる。というのも彼は「旧約聖書の中に……理性と衝突するようなものは何も見つけだすことができない」[15] からである。

レッシングにおいて理性と歴史の区別は、ドグマとしての宗教の排除を目的としたものだった。メンデルスゾーンにおいては逆に同じ区別がユダヤ教の救出のために利用される。ユダヤ民族がたどってきた歴史の経緯は背後に退き、この宗教本来の「永遠の内容」が強調される。真理を求める人間は歴史から乖離する。「現実的なすべてのもの、つまり回りの世界、共に生きる人間たち、歴史には、理性の承認が欠けている——この現実の消去は、世界

Hosei University Repository

の中でのユダヤ人の実際上の立場と密接に関連している。[16]」ユダヤ人は世界の中に何の足場も持たない理性そのものとなった。

のちにヘルダーは教養あるユダヤ人の偏見のなさを強調し、現実から切り離されているがゆえに、かえってよく現実を見通すことができるその洞察力の鋭さを賞讃した。「そもそもユダヤ人は、われわれが努力しなければ脱却できないような、あるいはまったく脱却できないような、さまざまな政治的判断から自由なのだから。[17]」世界から遊離しているがゆえに、社会的抑圧のもとに置かれているがゆえに、また国外離散（ディアスポラ）の状況に置かれているがゆえに、ユダヤ人は他の人びとにはない炯眼を獲得することができる。かくて二十世紀に至るまで連綿と生み出されてゆくユダヤ的知識人の原像が確立した。

Ⅳ

レッシングがモーゼス・メンデルスゾーンをモデルとして『賢者ナータン』を書いた、とはよく知られている事実である。メンデルスゾーンの死亡記事でも彼は「賢者モーゼス」と呼ばれているほどで[18]、作中の人物像と実在のモデルとがいかに当時同一視されていたかが窺える。しかしそれは本当にそうなのだろうか。実在のモーゼス・メンデルスゾーンがまず登場し、その身の丈に合わせてナータンが造形されたのだろうか。むしろ逆に理想的な知識人像としてのユダヤ人のイメージがまず存在し、それに合わせて実在のメンデルスゾーンが造形されていったのではなかったか。

『賢者ナータン』から遡ること三〇年前、つまりメンデルスゾーンとの出会いの五年前に、レッシングは『ユダヤ人たち』（一七四九）という題名の一幕物喜劇を書き下ろしていた。のちの『賢者ナータン』の原型と言ってよいだろう。二十才の時にすでにユダヤ人をテーマとした作品を書いていたということは、レッシングにとってこのテーマがけっして偶然的なものでなく、むしろ彼の思想の根幹に関わるものであったということを物語っている。啓蒙主義のどのような博愛的な宣言も、人間以下のものとしか見なされていないこの民族をそこに引き入れること

Hosei University Repository

なしには、単なる美辞麗句に終わりかねない、と彼には思われたのだ。ユダヤ人は、まさに彼らが軽蔑され抑圧されているがゆえに、最もよく「人間」を代表することができたのである。「ユダヤ人とのつきあいは単に、十八世紀の人々が寛容と呼んでいた偏見のなさを証明するのみではなく、人類の全種類と親しむことができるということの証明でもあった。[19]」

執筆の五年後に、この『ユダヤ人たち』を含む初期の劇作品がまとめて出版された時、レッシングは、主人公のユダヤ人があまりにも高貴に描かれており、現実のユダヤ人の姿と懸け離れている、という趣旨の批判を受ける。その時彼は、すでに交際の始まっていたモーゼス・メンデルスゾーンがこの作品について書いた手紙を証拠として引合いに出すことによって、そのような高貴なユダヤ人が実際に存在するし、また存在することが可能なのだと実証することができた。レッシングにとってはなんとも都合の良いタイミングでメンデルスゾーンという人物が登場してくれたわけである。

しかしレッシングがこの時受けた批判が、メンデルスゾーンという実例を持ち出すことによって片付くような、それほど単純なものであったかどうかは問題である。批判した人物はゲッティンゲンのオリエント学教授J・D・ミヒァエーリス、つまりのちのカロリーネ・シュレーゲルの父でリヒテンベルクの同僚、ゲオルク・フォルスターの友人であるところの人物だった。彼はレッシング自身やリヒテンベルクと同様啓蒙主義者であって、けっして保守的な宗教思想の持ち主でも反ユダヤ主義者でもなかった。そうであるだけに彼の批判は真面目に受け取られるだけの意味がある。レッシング自身にもそう思われたのだろう。彼は自らの反論の文章の中に詳細かつ誠実にミヒァエーリスの批判を引用している。批判の眼目は、この作品が謳い上げようとしている普遍的な人間愛が、極端な理想化によってむしろ損なわれているということにあった。主人公のユダヤ人について彼は言う。「現実にはキリスト教徒の悪意ある対処のために、キリスト教徒に対する憎しみ、あるいは少なくとも冷淡さによって満たされざるをえない、そういった行動原則や生活様式、教育を持つ民族のもとに、そのように高貴な心がいわばおのずから形づくられうるとは、たしかに不可能とは言えないが、しかし到底考えられないことである。[20]」

主人公のユダヤ人には名前がなく、ただ「旅の男」とされている。しかもこの劇中に登場するユダヤ人はただひ

Hosei University Repository

とりにすぎないのに、なぜか題名は複数なのである。こうしたことだけからもここに描かれたユダヤ人像の抽象性が窺われよう。レッシングが舞台に登場させるのは、現実のユダヤ人の大部分を占めるゲットーの住人ではなく、きわめて知的で裕福な例外的人物である。「ゲットーのユダヤ人行商人を実例として舞台に上げ、かの旅の男の場合にそうしたように、この人物を完成された人間愛の代弁者かつ実行者として呈示するなどということは、レッシングの頭には思い浮かびもしない。」[21] 主人公のユダヤ人はユダヤ人とは見えず、他人からそう思われることもないような人物である。キリスト教徒の従僕を雇うほど裕福であり、しかもこの従僕に旅先でも大量の書物を運ばせているほどの知的人物なのである。その蔵書たるや「泣かせる喜劇、笑わせる悲劇、情愛のこもった英雄叙事詩、深遠な酒もりの歌」[22] 等々ときわめて屈折した複雑怪奇な代物で、その語る言葉は、作者レッシングもかくやと思わせるほどの、教養ある啓蒙主義者のそれである。彼は最後に「私はユダヤ人なのです」[23] というたったひとつの台詞によって、友情とそして（喜劇本来のセオリーに反して）結婚の可能性を無に帰せしめる。孤独な知識人としてのユダヤ人像は、二十才のレッシングによって、モーゼス・メンデルスゾーンとの出会いから遡ること五年前にすでに造形されていた。

V

『賢者ナータン』の幕切れは、理性の力でひとつに結び合わされた人類を描き、普遍的な人間愛のすばらしさを謳い上げる大団円である。イスラム教徒であるサルタンのザラディンとその妹ジッタ、キリスト教徒である神殿騎士、ナータンの養女でありユダヤ教徒であるレヒャ、その全員が実は近親者であったことが判明する。展開のあまりの都合の良さに客席から笑いの洩れる場面だが、しかし笑うに笑えない要素が実はひとつだけ残っている。舞台の上の全員と友人でありながら、ただひとり血の繋がりのない者として、賢者ナータンは、あるいは賢者モーゼスは、孤独の裡に舞台の隅に佇んでいるのである。

注

(1) ハナ・アーレント『全体主義の起源』1「反ユダヤ主義」。大久保和郎訳、みすず書房、一九七二年、一一二ページ。

(2) アーレント、前掲書。一二六ページ。

(3) Johann Gottfried Herder: Adrastea. In: ders.: Sämmtliche Werke. Hrsg. v. B. Suphan, Berlin 1877–1913 (Reprint 1967), Bd. 1, S. 73.

(4) Heinz Mosche Graupe: Die Entstehung des modernen Judentums. 2. Aufl. Hamburg 1977, S. 97.

(5) 山下肇『近代ドイツ・ユダヤ精神史研究』。有信堂高文社、一九八〇年、四二ページ。

(6) Cf. Moses Mendelssohn: Schreiben an den Herrn Diaconus Lavater zu Zürich, In: ders.: Gesammelte Schriften. Hrsg. v. G. B. Mendelssohn, Leipzig 1863 (Reprint 1972), Bd. 3, S. 39.

(7) Marianne Awerbuch: Moses Mendelssohns Judentum. In: Bild und Selbstbild der Juden Berlins zwischen Aufklärung und Romantik. Hrsg. v. M. Awerbuch u. S. Jersch-Wenzel, Berlin 1992, S. 23.

(8) Cf. Mendelssohn: a. a. O. S. 39 ff.

(9) Cf. Georg Christoph Lichtenberg: Timorus. In: ders.: Schriften und Briefe. Hrsg. v. W. Promies, München 1967 ff., Bd. 3, S. 205 ff.

(10) Cf. Graupe: a. a. O. S. 100 f.

(11) Graupe: a. a. O. S. 105.

(12) Awerbuch: a. a. O. S. 39.

(13) Cf. Hannah Arendt: Aufklärung und Judenfrage. In: dies.: Die verborgene Tradition. Acht Essays. Frankfurt a. M. 1976, S. 112 ff.

(14) Cf. Gotthold Ephraim Lessing: Die Erziehung des Menschengeschlechts. In: ders.: Werke. Hrsg. v. H. G. Göpfert, München 1970 ff., Bd. 8, S. 489 ff.

(15) Mendelssohn: Correspondenz mit dem Erbprinzen von Braunschweig-Wolfenbüttel. In: Gesammelte Schriften. Bd. 3, S. 130.

(16) Arendt: a. a. O. S. 114.

(17) Herder: a. a. O. S. 71.

(18) Vossische Zeitung. Berlin 1786. Nr. 4. In: Das Neueste von gestern. Kulturgeschichtlich interessante Dokumente aus alten deutschen Zeitungen. Hrsg. v. E. Buchner, München 1912, Bd. 3, S. 380.

Hosei University Repository

Hosei University Repository

(19) アーレント、前掲書。一〇七ページ。
(20) Cf. Lessing: Über das Lustspiel Die Juden. In: Werke. Bd. 1, S. 416.
(21) Hans Mayer: Außenseiter. Frankfurt a. M. 1975 (suhrkamp taschenbuch 736, 1981), S. 335.
(22) Lessing: Die Juden. In: Werke. Bd. 1, S. 394.
(23) Lessing: a. a. O. S. 413.